ておられるのも知っていましたが、「お気の毒だな」と見て見ない振りをしていました。

「奇跡、奇跡」で帰れたのが不思議に思えてなりません。「先祖の信仰の力が奇跡となり、偶然となって危険から救われたのかも知れない」と思うようになりました。本当に、帰れたことが不思議でした。

四年生の長男が村の付き合いから、農作業、もちまきまで、一手に引き受けてくれました。主人からの仕送りは、もちろん無理な話です。自分の身の回りの物を整えるだけでも大変だったと思います。主人の体のことも心配ですが、私は行くことも出来ません。

そのころから、姑の目が緑内障で見えなくなり、耳も聞こえない、足も昔の捻挫（ねんざ）が再発したのか、歩けないという三重苦の生活になりました。

女の「性」の悲しさか。恥ずかしさだけが残っていて、大小便が出ても隠すので大変でした。お百姓仕事で疲れて帰っても、お湯を沸かして手足を拭き、布団を拭き、畳を拭いてから、お昼の食事の支度です。ガスもなく、水道もなく、洗濯機もなく、川で洗濯です。

どうしたら、この姑のお世話ができるのか必死でした。朝はやはり四時に起きていました。

苦労を考えるより、子どもたちの成長だけが楽しみでした。でも、時には「もう嫌！」とボンヤリすることも度々ありました。

そんな時に「母さんも老人になるんだよね」と言われてハッとし、子どもの声は「天の声」と反省させられました。

「靖国神社で再会しよう」と散華せられた英霊たちの御魂に…、そして血塗られた軍靴の上に築かれた今日の繁栄であることを忘れてはなりません。

英霊たちのご冥福を心からお祈りいたします。

感謝　合掌